

立教大学ジェンダーフォーラム主催 2019年度公開講演会
「ミソジニーとは何か？」

日 時： 2019年11月8日（金） 18:00～19:30

講 師： 上野千鶴子氏（東京大学名誉教授、認定 NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）
理事長）

会 場： 池袋キャンパス 8号館 8101 教室

2019年度公開講演会では、女性学・ジェンダー研究のパイオニアであり、指導的な理論家のひとりである上野千鶴子氏に、「ミソジニー」とは何かについてご講演いただきました。

しばしば「女性嫌悪」や「女性蔑視」と訳されるミソジニーについて、上野氏はイヴ・K・セジウィックの理論を下敷きとしながら、「男が男であるために（劣等な）女でないことを証明するための（女を他者化する）機制」と定義します。ホモソーシャルな社会では、男性はこの他者化の規制を通じてお互いを認め合うことによって男性になり＝主体化し、ホモソーシャルな集団の権力を更に強固なものとし、対する女性はこの仕組みの中で、（潜在的に）男性に選ばれる＝客体化されることによって女性になるため、ミソジニーを受け入れなければホモソーシャルな社会に参入できない構造になっています。そのため、男性にとって「女性嫌悪」として働くミソジニーは、それを内面化する女性にとって「自己嫌悪」として作用することになるといいます。また、男性同士のホモソーシャルな絆は、他方でホモエロティズムを抑圧した上に成り立っているため、自らを客体化＝女性化するかもしれない男、すなわち同性愛者を排除する性質をもち、この点でホモソーシャル、ミソジニー、そしてホモフォビア（同性愛者差別）は、緊密に絡み合うことになります。

このように「ホモソ」な社会においてミソジニーは瀰漫しており、セクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメントやドメスティック・バイオレンス、医学部の女子受験生に対する差別、戦時性暴力など、ジェンダー非対称な権力の濫用を通じて様々な形で実践されています。私たちがミソジニーを存在しないもののように扱ったり、差別を我慢したりするのは、ジェンダーが再生産される状況を変えることはできません。しかし近年では#MeToo運動などで声を上げる人が増え、こうした状況が変化してきています。私たちは日々の生活の中でも、ある個人のふるまいを「女だから」「男だから」などとジェンダーを参照して説明するような非対称な差別の実践があった場合、その場で訂正していく努力（=Undoing Gender）が必要であると、上野氏は語られました。

質疑応答では多数の学生の手が挙がり、学生たち自身がこれまで経験した違和感から率直な質問が寄せられました。時間内にすべての希望者の質問に答えられないほどであり、参加者の関心の高さがうかがえました。素晴らしいご講演をしてくださった上野氏に心より感謝申し上げます。

（立教大学ジェンダーフォーラム事務局 横山美和・片岡佑介）

